



講堂の円窓

復刊 96号

妙の光

昔の大きなお寺には、修行僧が講義を受ける「講堂」と呼ぶ建物があった。講堂といえば学校だが、その始まりはお寺だったのだ。

このたび寺の浄土化の一環として、20畳の和室を25畳に広げ、椅子席の講堂に改修した。

湿気で床が抜けた床の間も、鼠が走り回りシミの広がった天井も一新。これからはここでお齋も、研修会も快適にできる。床の間の代わりに大きく開けた円窓から、吹き込む風が心地いい。禅仏教が基のお茶室でよく使われる作りで、完全な円は完成した悟りの姿を意味する。次は講堂で悟りに近づく講義だ。

江戸時代に活躍した芸術家本阿弥光悦は熱心な日蓮宗信者で、京都鷹峰に土地を寄進し、そこに常照寺が建立された。その本堂裏手の茶室『遺芳庵』には、吉野太夫ゆかりの円窓「吉野窓」がある。この吉野窓は下が少し欠けた作りになっている。当時天下の名芸妓と謳われ、やはり熱心な日蓮宗信者だった吉野太夫は、この窓に完全ではない自分の姿を映し、自らを戒めていたと伝わる。

(写真の竹林はイメージで、来春に植栽予定)



行事案内



お彼岸中日法要

9月22日(木)祝

午前10時30分 安穩廟法要
11時 秋季彼岸会中日法要(本堂)
12時 おとき(どなたも当日受付)
午後1時 住職法話
*どなたでも、ゆつくりお参りいただけます。



お会式と第15回法号授与式

10月30日(日)

午前9時 戒名授与者研修
11時 お会式、法号授与式
12時 おとき
午後1時 法話
吉村妙悦上人(身延山久遠寺法務部長)
*詳細は別紙案内をご覧ください。生前戒名のご案内は6ページです。



七五三詣り

11月13日(日)

午前10時30分 受付
11時 ご祈禱



お子さん、お孫さんの健やかな成長を願い、七五三のご祈禱をいたします。
*詳細は別紙案内をご覧ください

秋の1日研修

11月27日(日)

午前9時～午後3時半
■会費 4,000円(昼食付)
■申込み 11月20日までにハガキ、電話、FAX、ホームページ連絡窓口から

お経を読んでみたい、少しは意味を知りたいという方。数珠の持ち方からお参りの作法など、分かりやすくお教えします。堅苦しいことは一切ありませんのでお気軽にご参加下さい。初心者と複数回者をグループ分けする予定です。

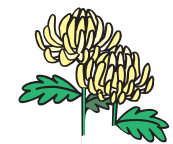


合同法事

12月4日(日)

今年、年回忌(法事)が当たっていたけれど都合でできなかったという方のために、合同の年回忌法要を営みます。檀信徒・安穩会員どなたでも。

午前10時 受付
10時30分 法要
11時30分 銘々で墓参り
■費用 ●塔婆1霊位2千円 ●お供物共通経費2千円
●お布施
■持物 ●位牌 ●墓参用の花、ロウソク、線香
●平服どうぞ
■申込 12月3日までに電話でもかまいませんが、なるべくFAXやハガキ、メール等で。



月例信行会

10月2日(日)、11月6日(日)、12月4日(日)

毎月第1日曜日 朝7時～9時
■会費 千円(当日、各自さい銭箱にお願いします)
*予約不要。当日お寺へ直接お越しください。お参り、法話、作務、朝粥の朝食とコーヒータイムがあります。



月例ボランティア

毎月15日

午前9時～12時 午後1時～3時
主に本堂清掃等をお願いしています。都合の良い時間にお越しください。昼食はご持参で。



お寺でヨガ

9月15日(木)・10月20日(木)・11月17日(木)

初心者向けのヨガ体験
■4:00～15:15 ■参加費 1回700円
■持ち物 ヨガマット、もしくはバスタオル
■講師 ノリコさん
どなたでも参加できます。予約制ですので、その都度電話での連絡をお願いします。
※12月から3月まで「お寺でヨガ」はお休みします。



今夏、お寺の台所に、素敵な白い丸テーブルが3台入りしました。「サイクロンテーブル」と呼ばれるデザインです。つかず離れずの3台のテーブルは、思った以上に使い勝手が良いようです。今までの櫓の長いテーブルは、円窓の下で私たちを見守っています。人の集まる形—円形は、これからの妙光寺のシンボルになりそうな予感があります。(新倉理恵子)

悲しみはいつまで

小川英爾

若い庭師

千葉県のDさんは大学で造園を学び、家の庭師を継いだ。作業の合間に篠竹を切ってきて横笛を作ってしまう、器用で感性豊かな人だった。

大学の先輩である野澤清先生が妙光寺の造園設計を担っていたことが縁で、仲間と共に妙光寺を度々訪れた。ボランティアで三重塔の庭を作り、工事の経過を記録した立派な写真集を作って私を驚かせたのもDさんだった。

突然の訃報

ところが8年前の12月、そのDさんは予定中の木から落ち、庭石に頭を打って亡くなってしまう。行年47歳の短すぎる生涯だった。お通夜に伺い、菩提寺による法要前にお経をあげさせていただいた。高校の同級生で、彼が「Nちゃん」と呼んで仲の良かった奥さんと、幼い2人の子供が遺された。また大事な跡継ぎのひとり息子を失った両親の落胆も大きかった。お墓や仏壇、法事のこと等々で、お嫁さんであるNさんの考えを聞く心の余裕もなかったようだ。

突然夫を喪った悲しみと、納得いかない出来事の連続。二重の苦しみを抱えて、Nさんはいつも夫から話だけ聞いていた妙光寺

三重塔造園工事のメンバー、後列左端がDさん。2004年。



へ相談に訪れた。その後も折に触れて手紙やメールが届いた。辛い気持ちや、薄皮をはぐような歩みで平静に向かう心の内が綴られていた。そして今夏のメールには、子供たちが高校に元気に通っているとあった。了解をいただいて、その一部を引用する。

故人からの叱咤激励？

「5月に夫のところにきましたところ、2軒先の空き区画で墓石を建てる工事をしていました。作業員さんに「お墓を開くのは、いくらくらいかかるのですか？」と聞いてみました。不思議そうな顔をされたので、「震災で骨壺が倒れていないか気になって」と説

明したところ、その場で開けてくださいました。「お金なんていらない」と言われ、お礼を言うことしかできませんでしたが、もうとにかく会えたことが嬉しくて、嬉しくて。

彼の骨壺はしつかりお墓の中で自立していました。7年ぶりの再会で胸が熱くなりました。その日は私たちの20年目の結婚記念日でした。偶然にしては出来すぎとも思えました。というのも、その4日後に、私たちが結婚式を挙げた船橋大神宮で挙式されるお客様があり、その衣裳のお世話を、私がすることが決まっていたからです。

船橋大神宮には、夫が亡くなってから一度も足を運んだことがありませんでした。夫を護ってくれなかった、と勝手に思っていました。他人様の幸せな日をお世話することに気が重くもあつたのです。夫がそんな私を叱咤激励してくれたような気がして、お墓参りの帰りにそのまま大神宮に行き、今までの非礼をお詫びしてきました。4日後の結婚式は晴天に恵まれ、お似合いのお二人を心からお世話することができました。

夫を喪ったことは私にとって一生塞がらない傷なのかもしれませんが、今回のことで少しだけ吹っ切れたような気がします。」

これを読んだ私は『常に悲しみをいだき、心はついに目覚めたり』というお経文の一節を改めて思い起こした。

左から石田徳人さん、齋藤作太郎



毎朝出勤前には叔母さんが住む母屋の仏壇へのお参りを欠かさない。

県内各地で神輿を担ぐ「^{しんおうかい}横櫻会」に属しお祭りを盛り上げるのが趣味である。また今年から地元消防団の部長に任命されて、部下30人のまとめ役としても活躍している。

共に明るい社交派

同世代の齋藤さんと石田さんはお互いに誘いあって、お寺の1年の行事に参加する。正月過ぎのお経練習会に始まり、春の『ご判様』では前日の幟立作業に当日のお練りと法要。夏の『送り盆』の裏方作業と法要出仕まで熱心に勤め、若手檀徒として期待されている。

2人は共に地元でのソフトバレーにも参加している。練習よりもその後の交流会が何よりの楽しみと言う明るい社交派だ。

2人とも「お寺の行事を手伝う機会が増えて、祖父母や親の供養のためにも積極的にお寺に足を運ぶ気持ちが強くなってきた。これからは自分達より年下の世代も誘って、お寺との縁を深めて行きたい」と語る。

ちなみに2人は結婚相手大募集中で、お嫁さんを迎える準備も万端。「こちらのご縁もぜひ宜しく」と笑顔で付け加えた。

ふたりは共に角田浜に生まれ、角田浜で暮らす同世代である。

仕事熱心な齋藤さん

齋藤作太郎さんの実家は材木屋、漁業、海の家を営む三人兄妹の長男。自身はトラック運転手をしている。

代々信仰心の篤い家で、妙光寺境内の「題目堂」を、亡き祖父の政六さんが改修工事をした。現在は題目堂の朝晩の開閉と読経、清掃を家族で毎日欠かさず行っている。

30年ほど前に齋藤家では大型漁船を新たに購入した。船は「法華経丸」と名付けて、造船所の進水式ではご前様が安全祈願法要を執り行い、現在も船は漁で活躍している。

作太郎さんは中学時代に漁業を手伝ったが、激しい船酔いが辛くて家業を継がなかった。しかし最近では漁を手伝い、船にも少しは慣れてきた。それでも今一つ気が向かないという。収穫した魚は、家族で営む浜茶屋で捕れたてを提供して喜ばれている。作太郎さんは夏の期間中、店主としてお客様の対応に追われている。

まとめ役石田さん

石田徳人さんは、農家の三人兄妹の長男として生まれた。高校卒業後、東京の大学の理工学部を卒業した。現在は会社員である。

石田家も祖父母がお寺に熱心で、徳人さんも昔ながらのしつけで厳しく育てられたという。平成11年に父を病で亡くし、同年に祖父、10年後には祖母、さらにその翌年には母を亡くした。家族を相次いで亡くした徳人さんは、自身の自立を考え、生家の敷地内に一軒家を建て暮らしている。



「同世代で寺へ」

新潟市角田浜

齋藤作太郎さん(46歳)
石田 徳人さん(40歳)

妙光寺とともに六十三年



齊藤新一さん（78歳）
祖父の代から、角田浜で大工をしている。妙光寺の檀徒ではないが、妙光寺の建物については誰よりも知り尽くしている。お寺では、困ったときには「齊藤大工さん」として頼りにされている。

Q それでは、常にあちこち直している状態だったんですね。

齊藤 そうです。その頃は境内に作業小屋があつて、ちょっとした材料はいつもその中に置いてありました。ホームセンターがあるような時代ではありませんでしたからね。そして心配なところがあれば、その度に直しに来ていました。『「判様」行事の時には、三日くらい前から通つて、周りから中からすべて見て回つて直しました。先代が前日に全部点検して「まだここがおかしいから」と言われて、また直しました。

Q 雨が降ると浸水したと聞いていますが。

齊藤 そうなんです。ここは、少したくさん降るとすぐに水が溜まつて、私もボートに乗つて玄關まで入ったことがあります。数年に一回は水害に遭つていました。必ず床上浸水する部屋があつて「水部屋」なんて言われていて、駆けつけてみたら畳は浮いてしまうので、表面は濡れてないんですね。先代に「いやあ、畳は濡れないで良かったね」と言つたら、「その上を今、あなたが濡れた長靴で歩いている」と言われて、笑ったこともありました。

Q 今はきれいになった妙光寺ですが、最初の工事はどこですか？

齊藤 鐘楼です。まだ、私が40代の頃でした。以前は外壁がついていて、中は本堂の屋根を葺くための萱を入れておく場所になっていました。その外壁を取りはらつてオープンにして、瓦屋根をすべて取り

換えました。今のご前様の代になってからは、ご存知のように工事の連続ですね。

Q 新本堂の仏具は、すべて齊藤さんが作られたと聞きましたが。

齊藤 そうです。正面のご本尊の前の台や、ご前様とお上人らが座る台、お経を入れる箱からその机まで、すべて私が作りました。

Q 本当は、大工さんの仕事ではありませんよね。

齊藤 本来は指物師とか、仏具屋さんの仕事です。でも仏具屋さんの見積もりが高かつたとかで、ある日お寺に呼ばれて来てみたら、設計士さんや世話方の皆さんが揃つていて、その前でご前様に「できるか？」と聞かれました。やったことがない仕事ですが、できそうだと思つたので「できる」と言つたのです。「幾らかかるか？」と尋ねられて、「では、これくらい」「じゃあ、決まりだ」という具合でやることになりました。何しろ初めての仕事ですから、大変でした。正面の中心になる橋の模様（日蓮宗の宗紋）は、ある日ご前様が図面のコピーを持ってきて「これを彫つてくれ」と言うんです。ああいうものを彫るためには特別なノミも必要ですが、私は大工だから特別な道具はないし、いろいろ工夫しました。出来上がった時は、我ながら「うまくできたな」と思いましたね。

Q 齊藤大工さんは、本当に何でもやってきたんですね。

齊藤 新本堂ができた平成元年には、旧本堂の床板を花台にして、竣工記念品に

Q 齊藤さんが大工としての修業を始めたのは、お幾つのおときですか？

齊藤 私は昭和13年生まれで、中学を出て15歳から親父のもとで修業を始めました。父から「とにかく大工になれ」と言われて、高校には行かずに仕事を始めたわけです。父は、私が24歳の時に亡くなりました。まだ68歳でした。その後私は30歳の時に一人立ちの大工になりました。

Q 妙光寺との付き合いは、お父さんの時からですね。

齊藤 父が先代の住職とお付き合いがあつて、始終お寺に出入りしてあちこち直したりしていました。だから私も父と一緒に、お寺の仕事をすることになったんです。

Q 先代のご前様は、どのような方でしたか？

齊藤 大変真面目な方でしたが、気さくな人柄でした。私は、先代からお酒の飲み方を教わつたようなものです。先代は酔うと、私の家に電話してくるんです。そして

妙光寺では、昨秋の大広間改装に続き、今夏は和室が講堂に生まれ変わりました。「妙光寺を、今を生きる皆さんの浄土にしよう」という計画に基づく改装です。それを一手に引き受けたのが、妙光寺の大工さんである齊藤さんです。実は齊藤さんは、大工さんの域を超えて長年にわたつて妙光寺の仕事に関わつて来ました。妙光寺の変貌を裏から支えてきた齊藤さんに、お話をうかがいました。

「ちよと用があるから来てくれ」と言われる。行つてみると、用事というのは一杯やることなんですね。そうやって、しょっちゅう一緒に飲んでいたものです。

Q その頃の妙光寺の建物は、かなり傷んでいたそうですね。

齊藤 敷地も広いし、奥様一人では草取りもままならないような状態でしたね。でも住職夫婦二人きりで管理しているわりには、こざつぱりとしていましたよ。いつもきれいにされていました。ただ、建物は古かつたですから、相当傷んでいましたね。

今の祖師堂になつているのが昔の本堂ですが、一度団体参拝が来ている最中に、床板が抜けて大騒ぎになったことがあります。何人も板の上に座つた状態で、板が床下に斜めに落ちてしまひ、上にいた人たちも滑り落ちました。怪我人が出なかつたのは幸いでした。大変だから急いで来い」と言われて、慌てて駆けつけました。人が乗つただけで、はずれるような状態だったんです。

図面通りです。円形は難しくて、縁の板を貼るのに苦労しました。

Q 振り返ってみると、妙光寺の仕事はいいがですか？

齊藤 正直に言えば、好きなことをさせてもらったなあという感があります。これは大工の仕事かな、と思うものもありました。でも基本的には断りません。「できそうだ」「やってみようか」「できた」の繰り返しです。出来上がつてから違うと言われると困るから、出来上がりはこうなるという説明は丁寧にしてきました。どれも、一生に一回の仕事です。挑戦の連続です。

Q あとは、茶室の水屋の工事ですね。他は、どうなりますか？

齊藤 水屋もあと少しで終わつて、次に台所の新しいテーブルの上に載せる調理用の台を頼まれています。軽くないと困りますから、材は桐ですね。廊下板の痛みもあります。ここは湿気が多いので、床や土台の腐食が早いんです。

Q 来年には住職交代式もありますから、まだまだ仕事がありそうですね。

齊藤 私も年ですから、高い所はきついんです。広間の改装の時は、脚立を幾度も昇り降りするのが大変でした。でも、まだまだ頼まれればやりますよ。何でも引き受けます。高い所以外ならね。

頼もしい言葉をありがとうございます。（聞いた人 編集部・新倉理恵子）

◆広い境内は様々な催しで賑わいました。



参道でのバザール



墓地の東屋での常経



お茶席「湛山亭」



大人気の「妙光寺めぐり」仏像解説中



新コーナー、良恵上人の「瞑想体験」

◆灯籠が映える川辺での法要にアンデスの笛が加わり、精霊を霊山へとお送りしました。



◆今年は日蓮宗布教研修所の若き僧侶7名が前日から参加。



事前に住職の講義を受ける研修員

◆今年も「花押ラリー(お上人のサイン)」が大好評でした。



寺のうごき夏



万灯のあかり ～妙光寺の送り盆～ (第27回フェスティバル安穏) 8月27日(土)

◆夏とは思えないさわやかな一日、家族連れなど約400名の参加者が集まりました。

メインゲストはフリーアナウンサーの伊勢みずほさん。自身の「がん」への闘病を語りながら、「生きる力を見つけた。～生老病死をうけとめて～」をテーマに小川住職、井上治代さんとも対談。満席の会場では共感し、うなづく人たちの姿が…。



お盆 施餓鬼法要 8月1日(月)

平日にもかかわらず、朝早くからたくさんの方がお墓参りに来られました。
施餓鬼法要に合わせて新盆法要を行いました。



岩屋七面様祭礼 8月19日(金)

法華經の守護神、七面大明神の岩屋へと向かう行列。



妙光寺が紹介されました

新潟県内発売の情報誌『キャレル』7月号に続き、8月20日発売の9月号でも妙光寺が取り上げられました。9月初旬、NHKテレビ『クローズアップ現代』の番組中に『妙光寺の送り盆』が紹介されました。

経営者向け雑誌『B O S S』9月23日発売号でも住職が紹介されます。こちらは全国の書店に並びます。



「キャレル」9月号



写真提供／碑文谷創さん、大滝主税さん、新倉順さん、田辺直輝さん

現住職最後の『生前戒名』授与

戒名は仏様の弟子になった証として、生前に住職から授けられるのが本来の姿です。葬儀の際に付けるのは間に合わせで、戒名料なるものも妙光寺では存在しません。

毎年の『お会式』行事に合わせて、希望者に授与して15年目、これまでに300名ほどの方が受けられました。来年は住職交代式に重なりますからお休みしますので、今年が現住職



による最後の授与となります。

戒名にはご希望の文字を入れ、歩まれた人生が想像されるようなものになります。費用は3万円です。お名前と戒名を刺繍した略袈裟と数珠の記念品、10月30日㊥当日の参加費が含まれます。ご希望の方には詳しい説明書と申込用紙をお届けします。
*お問合せ締切 10月10日

秋の一日研修

お経の読み方と内容、作法等を気軽に体験する研修会です。お一人でも心配なく参加できます。最終ページにご案内があります。

浄土化計画

住職交代に向けた改修工事や、新たな行事を『妙光寺浄土化計画』と位置付けて、心安らぐお寺作りを進めています。夏までに老朽化した和室を改修して、講堂とし、これから計画する講演会等の会場に使用します。

新しくなった湛山亭の水屋



講堂の円窓の下の床板として、台所にあった檜の大テーブルを再利用しました。台所には新たに小ぶりの丸テーブル3台を置いて、参拝時の休憩サロンとして開放します。

近年行事のたびにお茶クラブの方々が、皆さんにお茶席のご接待をしてくださいます。これが好評でお茶室が手狭になったため、利用頻度の低い裏トイレを廃止し、水屋に改修しました。使い勝手が良くなったと喜ばれています。

これらの工事費用は、皆様から寄付していただいた「浄土基金」から支

出しました。工事の一段落をもって、会計の途中報告を次号でさせていただきます。引き続きのご協力をお願い申し上げます。

住職交代式準備スタート

来年の秋に予定している住職交代式の準備作業が、委員会によって始まりました。正式には『法灯継承式』といえます。一人でも多くの方に参加いただけるよう、皆さまにはホテルに直接集合していただき、式場の妙光寺とホテルをインターネット回線で結び、式を生中継します。ホテルでの祝宴は、楽しい企画を検討中です。

早ければ年内に、遅くとも来年早々には、安穩会員を含む全檀信徒にご案内させていただきます。

安穩廟のお知らせ

『杜の安穩』の一部に起きている傾きを、今秋に改修工事します。

お盆の墓参で花立が不足してご迷惑をおかけしました。対応します。

誌上法話

小川英爾

今をここで生きる

「過ぎ去った日のことは悔いず、
まだ来ない未来にはあこがれず、とりこし苦勞をせず、
現在を大切にふみしめてゆけば、身も心も健やかになる。」

パーリ『中部經典』より

インドで聞いたシスターの法話

以前インド第3の都市コルカタにある『死を待つ人の家』を訪ねたことがあります。キリスト教のシスター（尼僧）としてノーベル平和賞受賞でも知られるマザー・テレサが開いた、宗教を問わず貧困と病気で苦しむ人たちの最期を看取するための施設です。今でも路上で死を迎える人がいる街ですから、その役割は大きいのです。

数日間通って患者の洗濯、掃除、話を聞く（身ぶり手ぶりですが）等の手伝いをしました。これは貴重な体験でした。このボランティアに世界各地から若者が集まり、日本の女子学生が多いことも驚きでした。

そこでは週1回、日本人のシスターが話す日があり、私達も女子学生に混じって聞かせていただきました。「あなた達は遠い日本からお金をかけてインドにまで来てボランティアをなさる。立派なことですが、そのお金と時間があれば周囲でもっと身近に困っている人たちの力になることができますよ」。優しい言葉の中に厳しい指摘が含まれているお話でした。

『置かれた場所で咲きなさい』

生前のマザー・テレサが1984年来日した際、通訳をしたのが渡辺和子さんというシスターです。シスター渡辺は昭和11年、9歳の時に二・二六事件で父を失いました。自宅居間

の目の前1mで、当時軍の中樞にいた父が青年将校に襲撃され、43発の銃弾で命を落としたのを目撃したのです。

やがて18歳でキリスト教に入信し、勉学を重ねて31歳という異例の若さで岡山ノートルダム清心女子大学の学長に就任し、91歳の現在も同学園の理事長です。ちなみに私の娘たち4人は、新潟市内にある系列校で中学高校6年間を過ごしました。当時娘たちから「今日は渡辺理事長先生のお話があって、すごく感動した」とたびたび聞いたものです。

そのシスター渡辺には数多くの著書があります。なかでも2012年に出版された『置かれた場所で咲きなさい』（幻冬舎）はベストセラーになりました。その中に「時間の使い方は、そのままその命の使い方、置かれたところでこそが、今のあなたの居場所なのです。『こんなはずじゃなかった、と思う時にも、その状況の中で『咲く、努力をしてほしいのです』の一文があります。インドで日本人シスターに聞いた話を思い出しました。

今ここで

冒頭のお釈迦の言葉を改めて読んでみてください。お釈迦様もキリスト教のシスター渡辺も、過ぎ去った過去やあてのない未来に心奪われることなく、今このときこの場で生きることの大切さを説いておられることがわかります。

「恩返しをしながら」

かけがえのない時間—お盆

暑かった夏も終わります。皆様体調はいかがですか？

暑くて厳しい中にも喜びや幸せのかけらがあったに違いないと思います。たくさんのお墓に手向けられた花や香、本堂に並ぶお盆供養の塔婆、送り盆の灯籠をみると暖かい気持ちになりました。あの世に行ってもこんなに賑やかに供養してもらえるのだと思うと嬉しいですね。私も最期は安穏廟に入りますから。

亡くなった方はもちろん、生きている人たちも帰ってくるこの季節。たびのもん（角田浜では家から離れている家族をこう呼びます）は来てよし、帰ってよしなどと聞きますが、賑やかにお過ごしの方もたくさんだったでしょう。あるいは静かに亡き人と向き合って語り合った方もおいででしょう。お盆は私たちにとってかけがえのない時間のような気がします。

小川家の四人姉妹もそれぞれ帰省しました。犬のモンタがそう長くは生きられないと思って帰ってくるのか、暇だから（笑）帰るのか…。今年は全員が30代になりますが、誰も結婚していないので気楽に帰ってきます。「新潟はなんでもおいしいねえ」と言いながらたくさん食べるので、オサンドン？ が大変です。いい年をした四人娘たちのこれからも心配

ですが、自立している大人にあれこれと口を出すのはばかられるので、おとなしくしています。何かと忙しいお盆の時期に、心おきなく実家ライフを満喫していました。

「ペイフォワード」

この夏も多くのボランティアや会議、行事において下さった方々には本当に頭が下がりました。お寺はみんなのもの！ とずっといい続けてきたことが実ってきたように思えて嬉しいです。おいしい野菜や食べ物もたくさんいただきました。こんなに良くしていただいて私はどうやってお返ししたらよいのだろうと悩みました。そんな時ある女性から「ペイフォワード」という言葉を聞きました。自分がうけた親切を別の人にお返しをするという意味の英語です。形は違ってもこのような気持ちで働けば直接お返しができなくても、お寺のためにはなるのではないかと 思うのです。

信行会へどうぞ

秋から冬にかけてはお彼岸、お会式と行事もありますが、毎月第一日曜日にはお経の練習とご前様の法話がきける信行会があります。朝七時からと早いのですが、朝のすがすがしい時間にお寺に親しんで下さいませ。お粥の朝食とコーヒーつきです。



質問

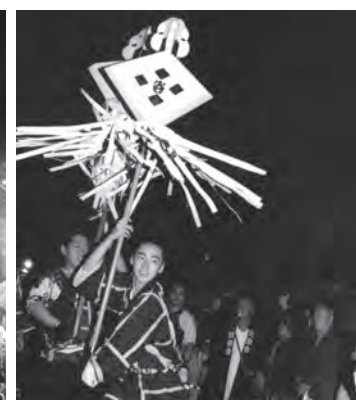
毎年秋に行われる “御会式”とは何ですか？

宗祖日蓮聖人を御供養し報恩感謝を捧げる法要のことです。毎年、ご命日の10月13日前後に各地の日蓮寺院で営まれます。

聖人御入滅の地である東京池上本門寺では、12日の夜から多くの檀信徒が集まります。万灯と呼ばれる灯籠提灯や纏を掲げ、団扇太鼓を叩きながら、皆でお題目を唱えて境内まで練り歩き参詣します。これは万灯行列と呼ばれ、賑やかに工夫を凝らした手作りの万灯が池上の町をお練りする様子は、秋の風物詩として江戸の昔から親しまれてきました。日蓮宗信徒だけでなく、毎年数十万人が集まるお祭りになっています。

また、本門寺や周辺の寺院では、夜通しの法要やお説教が行われ、日蓮聖人御入滅の13日午前8時にあわせた「臨滅度時法要」まで続きます。法要の最中には、聖人の御入滅を告げた「臨滅度の鐘」が打ち鳴らされ、前夜と異なる静謐な空気の中皆で祈りを捧げます。

今年の妙光寺のお会式は、10月30日です。別紙ご案内をご覧ください。



池上本門寺のお会式

第7回

宮澤賢治の言葉から

千葉県で研修中

の良恵です。

先日、母から突

然「宮沢賢治、見

たよ」というメー

ルがありました。

何のことだ？と最初は意味が分からなかつたのですが、よくよく考えてみると、研修所前の掲示板に貼り出した「今週の一言」のことでした。お経文や仏教上の名言を、研修員が解説している掲示物です。私は、法華経の信仰者だった宮沢賢治の『世界がぜんたい幸福にならない』うちは個人の幸福はあり得ない』という言葉を紹介していました。

気づいた方が写真を撮って、母に連絡してくれたそうです。まさか妙光寺にご縁の方に見て頂けるとは、またお寺に報告もして頂けるとは……。気恥ずかしさと有り難さを同時に感じました。これも、ご縁でしょうか。

